

9月の住職のひとこと



8月お盆中 早朝の本堂の全景

師父が他界して20年、振り返ってみれば時の流れは一瞬であった。今日まで貫いたものは、**〈必死〉**の一語に尽きる・・・無我夢中であった。

当時、宗教法人格であった幼稚園、そのままであったら今はもう存在しないだろう。一転、目を寺門運営へと向ければ、普請・再建の連続であった。

「一生不悟」・・・詩人 相田みつを氏の言葉である。一生悟らず、悟ったと慢心した時、成長は止まる・・・人は生涯にわたっての修養を忘れてはなるまい。

しかし、人はそれほど強いものではない。気力が萎えてしまう日もある、また苦しいこと淋しいことに胸ふさがれる日が続くこともある。その時、どういう言葉を口ずさんでいるか・・・それが、その人の運命を左右することも必ずあるはず。

〈投げられた ところで起きる 小法師かな〉小法師とは、達磨のこと。達磨は、いついかなる所へ放り出されても、文句1つ言わず、そこを正念場としてコロッと起り上がる。処世の道の要諦であろう。

秋の彼岸月、其れ其れに人生を潤す言葉を考えてみてはいかがであろうか。